

トピックス

1. 労災撲滅への挑戦

2. 夢見月 ～弥生～ 桜咲き桜散る



福留経営労務管理事務所
姫路龍馬会
社会保険労務士・行政書士
福留章

龍馬通信

No. 15

2019年3月号

夢見月 ～弥生～ 桜咲き 桜散る

三月の和名は「弥生」。語源は木草弥生月（きくさいやおいづき）。「弥」は「ますます」とか「いよいよ」という意味ですから、木や草がますます生い茂る月ということになる。弥生3月といえば花は桜。日本人の桜好きは別格で、全国の至るところに桜の名所がある。個人的には地元の姫路城の桜が好きだ。青空に白亜のお城。そしてそれを取り囲むようにして咲く桜の景色は圧巻だ。そして忘れられない播州赤穂浅野内匠頭の辞世の一首『風さそう 花よりもなお 我はまた 春の名残を いかにとやせん』あわれでもあり、美しい、人の死に際が目に浮かびます。さらさらと散る桜。最期に内匠頭は何を思い何を見たのだろうか。

種類にもよるが薄紅色の花が重なり合う様は遠目には雲のように見えて美しく、人の心を和らげ、暖かくする。夜桜の風情は真に妖艶な女性を彷彿とさせる。春の嵐に散る桜の散り際のはきはかなさと相まって日本人が最も愛する風情だろう。桜の事を「夢見草」ともいいます。そこから弥生3月を夢見月と呼ぶことがあります。

日、一日と暖かさが増す季節。人々は厳しい冬の寒さから開放されて春を迎える喜びが膨らみます。新芽を伸ばし次々と花を咲かせる草木たち。彼らとともに私たちが美しい夢をみましようか。



随筆 『龍馬と私』～ 坂本栄 自らの命を懸けて ～

坂本龍馬次姉。12歳年長の姉で土佐藩馬廻役300石柴田善右工門の次男、作衛門に嫁ぐ。善右工門は栄の実弟の不穏な行動を心配して離縁を申し渡す。20年連れ添った夫から形見に送られたのが「南国新刀吉行」の銘が入った刀。

文久2年（1862年）栄39歳、その刀と路銀を与えて龍馬の国抜け（脱藩）を助け、その禍が一家に及ぶのを防ぐため自刃して果てた。

坂本家では遺体を密葬し嚴重に口止めをして隠蔽したが、家中では維新後も密かに語り継がれた。この事件は多くの文献が龍馬に刀を渡したのは乙女であるとの定説をとり、栄の逸話を史実とは認めていない。龍馬が乙女に送った15通にも及ぶ手紙にも栄の消息はない。しかし坂本家では代々、刀を与えたのは栄であるとの伝承を引き継いでおりこの事実は重い。龍馬をめぐる女性たちの龍馬に寄せる愛情はそれぞれに熱いが、弟龍馬に夢を預けた点で共通している。栄もまたその中の一人で、愛する弟の為に自らの命をかけてまで後押しをした熱情を思うと胸が熱くなる。坂本家の墓地に「坂本栄女墓」が建立されている。

河出書房新社出版「坂本龍馬」龍馬交友録より抜粋



労災撲滅への挑戦 ～自分の身は自分で守る！！～

私の顧問先で昨年11月から今年1月にかけて労働災害、通勤災害が頻発している。1件の重大事故を除けばいずれも軽傷の事故であるが、顧問先各社においては従業員に対する安全と衛生の配慮義務を再確認し、労災事故0、無災害を目標に今一度、見直し点検をしてください。

「自分の身は自分で守る」これが労災防止の第一歩になるということは常々お話をしてまいりました。ある意味、会社の責任逃れのように見えますが、決してそういうわけではありません。

会社の機械や設備、安全衛生対策に疑義がある場合は積極的に提言・改善を要望することも含めて「自分の身は自分で守ら」なければならないのです。

重大事故の多くは会社が想定し得ない危険行動や不安全行動がその原因です。会社が100%に近い形で機械設備の安全管理をしても想定外のことが起これば事故になります。安全管理はやってもやってもきりが無いというのが本当のところ。もし体を損傷すれば会社は結果責任を負うことになります。また損害賠償の責任を負わされることにもなります。

緊急停止装置がそこにあつたら被災しないですんだかもしれません。しかしあらゆる機械設備のあらゆるところに緊急停止装置をつけることは物理的に無理です。厚労省の安全指針には、あらゆる危険な箇所はふたなりカバーをすることを明示しています。法は人の動きや生産活動をほぼ無視した形で構成されています。もちろんコンプライアンスは安全と衛生のために不可欠のものです。作業手順書やリスクマネジメントの必要性も強調されています。もちろんそれはそれで作成・実施されなければならないことです。しかしながら現実の問題として最後に被災するかしないかは各作業員の認識、つまり危険行動ではないか、不安全行動ではないかという危険に対する心構えにかかっていると思います。

重大事故の典型として機械のメンテで動力を落とさずに修理作業をしてというケースがあります。古くから言い続けられていることであり言ってみれば重大事故の大半はこの「動力を落とさずに」というところに原因があります。究極の原因とわかっていて、またその過ちを繰り返すのです。なぜでしょう。それは人間のおごりです。自分は被災しないという勝手な独りよがりです。動力を切るという勇気を持たねばならないし、面倒くさいは禁句です。機械は機械です。物理的に動くし危険かどうかの判断などしてくれませんか。ここに一つの仮説があります。しかしかなり核心をついていると思います。外国人労働者（実習生を含めて）の労災は少ないという事実です。外国人労働者は一般に働くということに真剣です。お金を稼ぐためには働かなければならない。家族を守り、母国への仕送りも欠かせません。つまり被災すればそれだけお金を稼ぐ機会を失ってしまうわけです。それに比べて日本人は一般的には豊かな生活をしています。世界的に見ても生活水準が高く、若い世代は豊かな環境で育ってきました。結論を言うと日本人は危険予知について極端に鈍感になっているのではないかと思います。シュンシュン沸いているやかんに手を触れればやけどする。こんな当たり前のことが身についていないのではないかと思います。ITやAIの進化によりいずれ人は危険な作業をしなくてもいい時代になるかもしれません。しかし今はまだ機械を動かすのは人であるのです。「自分の身は自分で守る」この一点を肝に銘じて日々の業務をしていただきたいと思います。労災事故を喜ぶ人は誰もいません。本人の痛みもさることながら、家族をも不安に陥れ、会社に損害を与えます。誰も喜ばないのです。

明るく楽しく元気よく、仕事に取組める職場環境を作り上げていきましょう。 「ご安全に！！」

